

「霧ヶ谷湿原生きもの観察会」報告

2020年10月11日(日) 13:00～16:00

主 催：広島県環境県民局 自然環境課
協 力：芸北 高原の自然館

講 師：上野吉雄氏（認定NPO 法人西中国山地自然史研究会）
：白川勝信氏（芸北 高原の自然館）

2020年10月11日、北広島町の臥竜山麓八幡原公園で、霧ヶ谷湿原生きもの観察会を開催しました。

集合場所は“山麓庵”と名付けられた古民家です。元気な小学生2名を含む総勢12名が集まり、霧ヶ谷湿原の成り立ちやそこにすむ動物や植物について学びました。

霧ヶ谷湿原のある北広島町の八幡地区は、生物多様性の観点から重要度の高い湿地として、環境省の「日本の重要湿地500」に選定されているところです。八幡地区には、かつてまとまった湿原が存在しましたが、河川整備やかつて国策であった牧場化事業などで乾燥化し、現在は点在している状況にあります。

霧ヶ谷湿原は、その八幡地区に点在する湿原の1つです。もともと湿原でしたが、50年ほど前に行なわれた牧場化事業によって湿原が失われ、その後牧場も閉鎖されました。長年放置されて乾燥化していた場所を再び湿原に戻そうと、自然再生推進法に基づく自然再生事業が進められています。

講師の上野さんと白川さんは、湿原の再生に当初から取り組んでこられた生き物の専門家です。白川さんは、霧ヶ谷で行っている自然再生事業について、わかりやすく説明してくれました。特に印象的だったのは、「環境を整えることにより、湿原の再生を自然の回復力で行う」ということでした。そのあと、専門の植物について詳しくお話してくれました。



上野さんは、先日捕まえたという“魚に見えるけど魚ではない”生きたスナヤツメや、希少なヒメシジミという蝶の標本を持ってこられて、この地域にすんでいる魚、虫、鳥、哺乳類など幅広い動物について、分かりやすく、面白くお話してくれました。スナヤツメは円口類といって魚類とは違う仲間であるそうです。

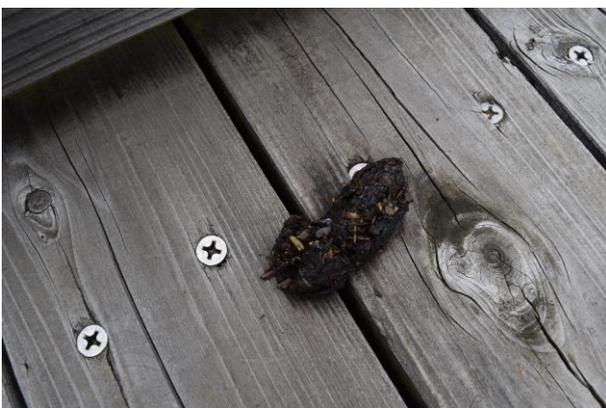
次に、「ひろしま県民いきもの調査」の紹介と、「いきものログ」の説明です。「ひろしま県民いきもの調査」は、広島県が生物多様性を守る取り組みとして行っている県民参加型の調査で、環境省がインターネット上に開設している「いきものログ」を活用して情報を収集しています。そのため、まずは「いきものログ」へ登録していただくことが必要です。実際にスマートフォンの画面で実演しながら参加者に挑戦してもらいました。

これらが終わり、さあ、霧ヶ谷湿原へ出発です。参加者は各自の車で移動し、木道前に集合。観察会が始まりました。

木道に入ると・・・さっそく熱心な質問があがります。「これはアケボノソウとって、・・・」、講師のお二人が名前や生態を的確に回答してくれます。



「おっ、これはキツネの糞だね。この時期バッタをよく食べるんだ。ほら、ここに脚が見えるでしょ?」。みんなで順番に確認してから少し歩くと、今度は頭上に鳥の大群が飛んでいます。「あれはアトリの群れだね。あっ、あっちにハイタカがでました!」、上野さんが次々に説明していきます。見るものがいっぱいあって、なかなか先へ進めません。



白川さんは、木道を先導して歩きながら、要所要所で湿地の状態や植物について解説してくれます。植物の種類や構成から、湿地の状態がわかるそうです。花が咲いている植物としては、マアザミ（キセルアザミ）、リンドウ、オタカラコウが、実ができている植物としては、クサレダマなどがありました。



マアザミ（キセルアザミ）



リンドウ



オタカラコウ



クサレダマ

湿原の下流から観察を始め、最上流の水路にやってきたところで、上野さんと白川さんが参加者と一緒になって、石を返して何かを探しています。トビケラの幼虫がみつかりました。魚のタカハヤもいました。

小学生の参加者がヤマアカガエルを捕まえました。白川さんが受けとって呪文を唱えると、カエルは動かなくなりました。お腹を軽く円を描いて撫でると動けなくなるそうです。参加者は目を輝かせて自分でもやってみてから、我に返って動き出したカエルを捕まえた場所に逃がしていました。



白川さんが、現在の霧ヶ谷湿原の状況を説明してくれました。以前に牧場化事業が行われた時には、土地を乾燥させるため、中央に水路を配して水はけを良くしていました。湿地の再生事業では、この水路を埋めるのではなく、壁面のコンクリートを壊して水路を浅くし水が溜まりやすくすることと、要所に取水堰とそこから水を流す導水路を作ることによって、地域全体に水が行きわたるようにしているそうです。今では、増水時に流れてくる石や土砂によって中央の水路が徐々に埋まってきていて、将来的にはさらに湿地化が進むことが期待できるそうです。一方、導水路が埋まってしまうのは困るので、これはボランティアが人力で手入れをしているとのことでした。

およそ2時間をかけて木道を歩き、霧ヶ谷湿原とそこでくらすたくさんの生きものについて教えていただきました。

木道を抜け、車道に出ても新しい発見が続き、つい足が止まります。なごり惜しい気持ちでしたが観察会の終わりの時間が近づいてきました。



霧ヶ谷湿原は、人の手によって一度は失われた湿原を自然の力を使いながら再生しようとしている途中にあります。毎年の変化を調査で確認しながら、より良い方向へ進むように大勢の方が尽力されていることがわかりました。毎年の変化を見るのが楽しみだ、という白川さんの言葉が印象に残りました。